

# 現代朝鮮語における言語規範と認識度

—いわゆる〈사이시옷〉を対象に—

辻野裕紀

## 1. はじめに

本稿は、〈사이시옷<sup>1)</sup>〉(間のs)の表記に関する若年層朝鮮語母語話者の認識度を、実態調査を通して闡明せんとするものである。

## 2. 〈사이시옷〉とは何か

### 2.1. 〈合成語における濃音化〉と〈사이시옷〉

現代朝鮮語において、2つの形態素が接合する際、後行要素の頭音の平音が濃音(喉頭化音)と交替することがある：

- ① 고개 [koge] 《峠》+ 길 [kil] 《道》→ 고갯길 [kogεk'il] ~ [kogε'k'il] 《坂道》
- ② 바다 [pada] 《海》+ 새 [sε] 《鳥》→ 바닷새 [padas'ε] ~ [padass'ε] 《海鳥》
- ③ 가을 [kaul] 《秋》+ 비 [pi] 《雨》→ 가을비 [kaulp'i] 《秋雨》
- ④ 비빔 [pibim] 《混ぜること》+ 밥 [pa<sup>p</sup>] 《ごはん》→ 비빔밥 [pibimp'a<sup>p</sup>] 《混ぜごはん、ビビンバ》

こうした現象は〈合成語<sup>2)</sup>における濃音化〉<sup>3)</sup>と称することができるが、①②と③④を較べてみると分かる通り、先行要素が母音で終わっているときには、先行要素の末音節のパッチム(終声字母)<sup>4)</sup>として‘ㅅ’(s)が表記されている。この‘ㅅ’を〈사이시옷〉<sup>5)</sup>と呼ぶ。〈사이시옷〉は

<sup>1)</sup> 중간시옷とも称される。共和国(北朝鮮)では사이시옷と呼ぶ。

<sup>2)</sup> なお, 맨 앞의 사람 [싸람] 《一番前の人》のように, 合成語ではなく, 句における濃音化の例も存在するが, これは中期朝鮮語(15世紀)の「名詞+処格+ㅅ」に由来するものである。伊藤英人(2013:290)参照。귀엣고리, 귀엣말, 눈엣가시, 몸엣것, 소금엣밥, 옷엣니, 옷음엣소리, 한술엣밥などといった語も併せて想起されたい。なお, こうしたタイプの〈사이시옷〉を엄태수(2013:72)は「형태적 사이시옷」と呼んでいる。本稿では, 句における濃音化は埒外とし, 主に〈合成語における濃音化〉について扱う。

<sup>3)</sup> 朝鮮語には「濃音化」と呼びうる現象が他にいくつもあるので, 単に「濃音化」ではなく, 〈合成語における濃音化〉としておく。他には, (ア)口音の終声の直後における濃音化(e.g. 잡지 [잡찌] 《雑誌》), (イ)子音語幹用言における語尾の濃音化(e.g. 신고 [신포] 《履いて》), (ウ)ㄷ連体形の直後における濃音化(e.g. 먹을 것 [머글것] 《食べるべきもの》), (エ)漢字語における /ㄷ/の直後の /ㄷ, ㅅ, ㅈ, ㅊ/の濃音化(e.g. 발달 [발달] 《発達》), (オ)漢字語における例外的(語彙的)な濃音化(e.g. 헌법 [헌법] 《憲法》。菅野裕臣(2004:22-24)参照), (カ)その他(e.g. 과 선배 [과선배] 《学科の先輩》, 버스 [베스] 《バス》, 두부 [두부] 《豆腐》(全羅道方言)など)。

<sup>4)</sup> しばしば終声とパッチムが峻別されていない論考が散見されるが, 終声(音節末子音)は音のレベル, パッチム(終声字母)は文字のレベルに属するものであり, 截然と区別すべきものである。本稿が扱う〈사이시옷〉についても, 音のレベルなのか文字のレベルなのかを曖昧にしている研覈が見られるが, 本稿では〈사이시옷〉はどこまでも文字のレベルに属するものとして議論を進める。

<sup>5)</sup> 日本語ではしばしば「間のs」などと呼ばれる。이익섭 외(1997)の日本語訳である, 李翊燮他

表記上〈濃音化のマーカ―〉として機能している<sup>6</sup>。

一方、先行要素が子音で終わっているときには、この〈사이시옷〉は表記されず、濃音化は文字のレベルに反映されない<sup>7</sup>。

〈사이시옷〉は、後行要素の頭音が濃音化し得ない鼻音や /i/, /y/ の場合にも表記されうる：

- ⑤ 비 [pi] 《雨》+ 물 [mul] 《水》→ 빗물 [pinmul] 《雨水》
- ⑥ 나무 [namu] 《木》+ 잎 [i<sup>p</sup>] 《葉》→ 나뭇잎 [namunni<sup>p</sup>] 《木の葉》
- ⑦ 수 [su] 《雄》+ 염소 [jɔmsɔ] 《山羊》→ 숫염소 [sunnjɔmsɔ] 《雄山羊》

⑤のように後行要素の頭音が鼻音の場合には、〈口音の鼻音化〉を起こし、〈사이시옷〉はゼロや [ʔ] ではなく [n] で実現する。

⑥、⑦のように後行要素の頭音が /i/ や /y/ の場合には、まず〈n挿入〉を起こし、さらに〈口音の鼻音化〉を起こすため、⑤と同じく、〈사이시옷〉は発音上 [n] で実現する<sup>8</sup>。

また、〈사이시옷〉は、後行要素の頭音が /i/ や /y/ 以外の母音、半母音の場合にも表記されることがある。そうした場合、〈사이시옷〉は [d] で実現する<sup>9</sup>：

- ⑧ 개 [kɛ] 《海水と河川の水が混じり合う河口》+ 완두 [wandu] 《エンドウ》  
→ 갯완두 [kɛdwandu] 《ハマエンドウ》

逆に言うと（というより、このほうが言語学的にはより正確なのであるが）、こうした現象が発音上起きる場合に、〈사이시옷〉が表記される。以下、便宜上、〈合成語における濃音化〉という術語を、上の⑤～⑧のような現象も含めて用いることにする。

〈사이시옷〉の表記には語種も関わっている。〈사이시옷〉は構成要素の少なくとも一方が

(2004:88, 118) では〈사이시옷〉を「繋ぎのハ」と訳している。鄭熙昌 (2007:427) も「繋ぎのハ」と呼んでいる。金永奎 (1992:57) は「中間ハ」、英語文献の Sohn, Ho-min (1994:484) は“epenthetic s”とする。

<sup>6</sup> なお、韓国の「標準語規定」の「標準発音法」第30項では、〈사이시옷〉は発音せず後行要素の頭音のみを濃音化させて発音することを「原則」とするが、併せて〈사이시옷〉を [ɾ] で発音することも「許容する」としている。例えば、넷가《川辺》であれば、[내까] という発音が原則だが、[넛까] という発音も許容するということである。

<sup>7</sup> なお、中期朝鮮語では、先行要素が子音で終わっていても、ハ (s) を表記し得た。また、共和国（北朝鮮）の嘗ての正書法では、〈合成語における濃音化〉と〈n挿入〉を 사이ㅅ이라고呼ばれるアポストロフィ記号によって表記に反映させていた。

<sup>8</sup> こうしたことから、〈n挿入〉と〈사이시옷〉の挿入は相互排他的ではなく、いわゆる給与 (feeding) 関係にあると言える。こうした問題については、辻野裕紀 (2014b:22-23) を参照されたい。

<sup>9</sup> なお、こうした例としては、갯완두以外に、갯우렁이《サキグロタマツメタガイ》、웃어른《一族の長老》、웃옷《外側に着る服》、의붓아버지《継父》、의붓어머니《継母》などを挙げうる。しかし、後で見る「ハングル綴字法」の第30項では、後行要素の頭音が /i/, /y/ 以外の母音、半母音の場合について触れられていない。ただし、웃어른などについては、「標準語規定」の「標準語査定原則」第12項で、웃全体を1つの形として見做している。웃-は위-/윗-と異なり、웃국《酒の上澄み》、웃기《果物の上部の飾り》などのように、「下、上」の対立がない場合に用いる接頭辞である。cf. 윗사람《目上の人》、아랫사람《目下の人》。

固有語でなければ表記されない<sup>10</sup>。漢字語で〈사이시옷〉が表記されるのは、숫자《数字》など、ごく一部の二字漢字語に局限される。

〈사이시옷〉が表記されるか否か、音のレベルで言えば、〈合成語における濃音化〉が起きるか否かの分水嶺は未だ闡明されておらず、語毎に決まっていると言うほかない<sup>11</sup>。詮ずるに、かかる現象はどこまでも語彙的（個別的）なものであり、個々の具体的な語に〈사이시옷〉が表記されるか否かの判定は、最終的には辞書に依拠することとなる。

また、その機能も同じく分明ではないが<sup>12</sup>、少なくともその通時的な濫觴は、中期朝鮮語の属格助詞‘ハ’に遡及する<sup>13</sup>。こうしたことが関わり、〈合成語における濃音化〉は、意味的に等位構造の場合には生じない（例えば、봄가을 [봄가을]《春秋》と봄바람 [봄바람]《春風》、아래위 [아래위]《上下》と아랫사람 [아래사람]《目下の人》を各々較べられたい）。この点において、〈合成語における濃音化〉は、日本語の連濁と類似している<sup>14</sup>。

## 2.2. 〈사이시옷〉に関する言語規範

次に、〈사이시옷〉が言語規範でいかに規定されているか概観してみよう。大韓民国（韓国）の言語規範には、現在次の4つがある<sup>15</sup>：

ハンゲル綴字法（한글 맞춤법）1988年  
標準語<sup>16</sup>規定（표준어 규정）1988年

<sup>10</sup> ただし、〈漢字語+漢字語〉でも 전세방 [전세방] のように、濃音化が起きることはある。

<sup>11</sup> 李翊燮他（2004: 118）は「繋ぎのハの正確な統語意味論的機能ははっきりしておらず、（中略）全く同じ音韻論的な環境でも一定して現れるわけではなく、繋ぎのハが出現する条件はまだ明らかにされていない」と述べている。また、各構成要素は同じでも、意味の違いによって、〈사이시옷〉が挿入されたりされなかったりするケースもある：e. g. 고기배《魚の腹》と고깃배《漁船》, 나무집《木造の家》と나무집《木材屋》, 돌집 [돌: 집]《石造の家》と돌집 [돌: 집]《石材屋》。박덕유（2009: 190）参照。他にも各構成要素の意味を問題にしなければ、次のような対もある：강바람 [강바람]《空っ風》と강바람 [강바람]《川風》, 돌다리 [돌다리]《石橋》と돌다리 [돌다리]《小川にかけた小さな橋》, 발병 [발병]《発病》と발병 [발병]《足の病氣》, 장기 [장기]《将棋》と장기 [장기]《特技》, 후일《後日》と후일《あとのこと》など。なお、共和国（北朝鮮）の正書法（1987年の「朝鮮語規範集」）では〈사이시옷〉は用いられないが、셋별《明けの明星》と빗바람《雨混じりの風》では例外的に〈사이시옷〉が用いられている。これは各々새 별《新たな星》, 비바람《雨と風》との混同を避けるためである。

<sup>12</sup> 機能については、임흥빈（1981）、전철웅（1990）、기세관（1991）、김창섭（1996）、하세경（2006）などの先行研究を参照。

<sup>13</sup> 〈사이시옷〉の通時的な側面については、안병희（1968）、안병희・이광호（1990）、福井玲（1993, 2013）、이기문（1998: 2005）、권용경（2014）などを参照。郷歌などの古代語資料では「叱」という字で書かれていた。福井玲（2003, 2013）参照。

<sup>14</sup> 日本語の連濁については、佐藤大和（1989）、窪蘭晴夫（1995）、三宅知宏（2011）、高山倫明（2012）などを参照。

<sup>15</sup> 中島仁（2002: 119）参照。また、現行の4つの言語規範は、いずれも 국립국어원（国立国語院）の website で原文を閲覧できる。参考資料として、本稿末に「ハンゲル綴字法」と「標準語規定」の目次（引用者による日本語訳）と、朝鮮語の様々なローマ字表記法を現行の「ローマ字表記法」と併せて提示する。韓国の言語規範については、이희승・안병희（1989）、민현식（1999）、鄭熙昌（2007）、정희창 감수（2007）なども参照。なお、紙幅の制約のため、共和国（北朝鮮）の言語規範などについては本稿では触れない。共和国の朝鮮語や言語規範については、김민수 편저（1997）、中島仁（2002: 122-124, 138-139）、鄭稀元（2007）などを参照されたい。延辺朝鮮族自治州など、中国の朝鮮語や言語規範については、梅田博之（1993）、伊藤英人（2006）、宮下尚子（2007）、곽충구・박진혁・소신애（2008）、리명복 외（2008）、辻野裕紀（2010）などを参照。

<sup>16</sup> しばしば誤解されるが、「標準語」と「共通語」は異なるものである。菅野裕臣（1986a: 48）は、言

外来語表記法 (외래어 표기법) 1986年<sup>17</sup>

国語のローマ字表記法 (국어의 로마자 표기법) 2000年

そして、〈사이시옷〉に関する事項は、上の4つのうち、主に「ハングル綴字法」の第30項に定められている<sup>18</sup>。以下、日本語に訳して引用する<sup>19</sup>：

**第30項** 사이시옷は、次のような場合に、末音として表記する。

1. 固有語の合成語で、前の語が母音で終わる場合

(1) 後ろの語の初声が濃音で発音されるもの

고랫재	긋밥	나룻배	나룻가지	넋가	뎃가지
뒷갈망	뎃들	머릿기름	모깃불	못자리	바닷가
뎃길	뎃가리	부싷들	선짓국	씻조각	아랫집
우렁잇속	잇자국	젓더미	조갯살	찾집	젓마취
킷값	뎃대	헛별	헛바늘		

(2) 後ろの語の初声‘ㄴ, ㄹ’の前で‘ㄴ’の音が加わるもの

뎃나물	아랫니	뎃마당	아랫마을	뎃머리
잇몸	갯목	넋물	뎃물	

(3) 後ろの語の最初の母音の前で‘ㄴㄴ’の音が加わるもの

도리갯얼	뎃웃	두뎃일	뎃일	뎃입맛
베갯잇	웃잇	갯잇	나뎃잇	뎃잇

語学者は「一国のどこでも共通に意思を交換することのできる言語としての共通語」と「共通語を洗練し、一定の基準で統制した理想的な言語」としての「標準語」とを概念上区別すると述べている。また、「標準語」と「ソウル方言 (ソウルことば)」も異なる。野間秀樹 (2007: 222) は「標準語」と「ソウル方言」の違いについて次のごとく委曲を尽くして説明している：「韓国語のいわば人為的に定められた「標準語」と、自然に形成されている方言とは区別せねばならない。韓国語の標準語はソウル方言を基礎に作られているものであるが、アナウンサーなど、訓練を経た一部の職業的な人々が、放送などの一部で実践しようとするものであって、いわばどこまでも理念的な存在であるのに対し、ソウル方言を始めとする方言は生得的な言語である。したがってソウル方言が母語であることはいくらかでもありうるが、「標準語」が母語であるなどということはありません。」また、菅野裕臣 (1986a: 49) は「朝鮮語は日本語とはちがって標準語とソウルことばとの差が大きいといえます」と述べている。

<sup>17</sup> 1986年当時は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、日本語、中国語の7言語の表記細則があったが、1991年にはポーランド語、チェコ語、セルボクロアチア語、ルーマニア語、ハンガリー語が、1995年にはスウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語が加わった。さらに、2004年にはマレー・インドネシア語、タイ語、ベトナム語、2005年にはポルトガル語、オランダ語、ロシア語が追加され、2014年11月現在、21言語の表記法が提示されている。朝鮮語の外来語表記法については、菅野裕臣 (1985b)、이희승・안병희 (1989)、中島仁 (2002, 2007)などを参照。

<sup>18</sup> また、他に「標準語規定」の「標準語査定原則」でも、《雄》を表す接頭辞ㄴ-/ㅅ-の問題 (第7項)、《上》を表すㅅ-/ㅇ-の問題 (第12項) など、〈사이시옷〉に関わる規定が見える。また前述の通り、「標準発音法」第30項には〈사이시옷〉に関する発音の規定がある。

<sup>19</sup> 日本語訳は引用者。語例は原文のまま。

## 2. 固有語と漢字語からなる合成語で、前の語が母音で終わる場合

## (1) 後ろの語の初声が濃音で発音されるもの

깃병	머릿방	뺨병	붓득	사자밥
셋강	아랫방	자릿세	전셋집	찾잔
찾중	춧국	콧병	땃줄	딛세
핏기	햇수	희가루	희배	

## (2) 後ろの語の初声‘ㄴ, ㄹ’の前で‘ㄴ’の音に加わるもの

겻날	제삿날	훗날	뫼마루	양칫물
----	-----	----	-----	-----

## (3) 後ろの語の最初の母音の前で‘ㄴㄴ’の音に加わるもの

가윗일	사삿일	예삿일	훗일
-----	-----	-----	----

## 3. 2音節からなる次の漢字語

곳간 (庫間)	셋방 (貰房)	숫자 (數字)
차간 (車間)	뫼간 (退間)	횃수 (回数)

このように、「ハングル綴字法」では、「これこれのように発音するものは〈사이시옷〉を表記する」という形の規定の仕方になっており、「正しい発音」を知らなければ、〈사이시옷〉を表記すべきか否かの判断はつかない。しかし、〈合成語における濃音化〉には、世代差や地域差、個人差が認められ<sup>20</sup>、母語話者であっても、〈사이시옷〉を表記すべきか否かの判断に迷うものが数多あることが予想される<sup>21</sup>。

## 3. 実態調査

茲からは実態調査について述べる。本調査は、若年層朝鮮語母語話者<sup>22</sup>の、〈사이시옷〉の表記に関する認識度を闡明するためのものである。

管窺によると、〈사이시옷〉の表記に関する認識度を調査した先行研究としては、中島仁(2002)と송대현(2011)がある。

中島仁(2002)は、韓国の言語規範がどの程度社会的に認識されているのかを、「日本に留学中の韓国人」23名を対象として総合的に調査したものであり、〈사이시옷〉に関する項目は3語にとどまっている。

송대현(2011)は、忠清北道地域の公的機関に勤める公務員95名を対象としてアンケート調査を行なったもので、本稿の対象とするインフォーマントとは属性が大きく異なる。また、調

<sup>20</sup> 엄태수(2013:77)は「世代間, 地域間, または状況によって一個人も 사이시옷 介入形とそうでないものを随意に選択する特徴がある」(日本語訳は引用者)と述べている。また, ソウル方言話者に限定しても, 〈合成語における濃音化〉に世代差や個人差が存在することは, 국립국어연구원(2003)のデータを瞥見するだけで明らかである。

<sup>21</sup> この点では日本語の連濁と異なる。日本語の連濁でも, けんきゅうしょ~けんきゅうじょ《研究所》, わるくち~わるぐち《悪口》などのように揺れが見られるものがあるが, 朝鮮語の〈合成語における濃音化〉ほどではないと思われる。

<sup>22</sup> ここで言う「若年層」とは概ね20代を指す。18歳, 19歳のインフォーマントも含まれる。アンケート用紙には年齢を記入する項目も設けたが, 年齢を記入せずに提出されたアンケート用紙が複数あり, 平均年齢等を出すことはできない。

査語彙数も40語と、〈사이시옷〉プロパーの研究にしては少なく、〈사이시옷〉の認識実態により深く肉薄するためにはさらなる調査が必要である。

そこで、筆者は、韓国・ソウルの大学に通う大学生（すべて朝鮮語母語話者）全120名を対象に、〈사이시옷〉が表記されるべきか否かの判断に窮する可能性のある合成語126語について、二者択一のアンケート形式で調査を実施した<sup>23</sup>。詳細は稿末に付した、実際のアンケート用紙を参看されたい。

以下、合成語の構造（音節数）ごとに各々分析を行なう。

### 3.1. 〈1音節+1音節〉

まず、〈1音節+1音節〉という構造のものには二字漢字語が含まれ、これらの正答率は一体に高い。平均正答率は88.1%である<sup>24</sup>：

二字漢字語（平均正答率：88.1%）

番号 <sup>25</sup>	語	日本語訳	正答者数（人）	正答率（%）
6	숫-자	数字	120	100.0
21	치-과	歯科	120	100.0
57	도-수	度数	119	99.2
71	탕-잔	湯呑み茶碗	118	98.3
56	횃-수	回数	110	91.7
72	초-점	焦点	96	80.0
35	개-수	個数	57	47.5

二字漢字語の場合は、前章で見たように、ごく一部の語を除き、発音を問わず、〈사이시옷〉が表記されない。上の語はいずれも濃音化が起きるものだが、規範がよく認識されているようである。개-수의正答率は相対的に低く現れたが、これは횃-수의影響があるやもしれない。

二字漢字語を除き、他の〈1音節+1音節〉について見ると、大まかな傾向として、〈사이시옷〉が挿入される語の正答率は高く、〈사이시옷〉が挿入されない語の正答率は低いと言える。前者の平均正答率は82.3%、後者の平均正答率は49.3%である。〈사이시옷〉が挿入される語群と挿入されない語群とに分けて見てみよう：

〈사이시옷〉が挿入される〈1音節+1音節〉の語（平均正答率：82.3%）

番号	語	日本語訳	正答者数（人）	正答率（%）
65	깨-잎	胡麻の葉	120	100.0

<sup>23</sup> アンケート調査は、2014年の9月と10月に、韓国ソウル特別市の2つの大学（誠信女子大学校、崇実大学校）で実施された。インフォーマントはすべて誠信女子大学校、崇実大学校に通う大学生である。アンケートの例文は、국립국어연구원（1999）、송대현（2011）からそのまま引用したものや一部斧鉞を加えたもの、筆者による作例などが含まれる。いずれも事前に朝鮮語母語話者のチェックを受けたものである。

<sup>24</sup> 正答率は小数第二位を四捨五入している。以下提示する比率もすべて同様。

<sup>25</sup> 稿末のアンケート用紙における、当該の語が含まれる問題番号。

4	넷-째	4番目	119	99.2
34	땀-목	筏	119	99.2
94	윗-집	上の方にある家	119	99.2
30	윗-물	上流の水	118	98.3
15	윗-목	オンドルの焚口から遠い部分	116	96.7
60	귓-전	耳元	114	95.0
92	땀-길	船路	114	95.0
102	갯-빛	灰色	112	93.3
33	숫-쥐	雄鼠	110	91.7
24	햇-수	年数	110	91.7
79	숫-양	雄羊	108	90.0
103	횃-집	刺身を出す飲食店	100	83.3
93	댓-잎	竹の葉	84	70.0
75	갯-날	頼母子講の会合の日	78	65.0
91	훗-일	あとのこと	70	58.3
26	툭-국	ひどく酸っぱい食べ物	39	32.5
64	갯-값	二束三文	28	23.3

훗-일의正答率が相対的に低めに現れているのは, 후일《後日》と錯誤したインフォーマントが少なからずいたからかもしれない。

툭-국의正答率の低さは, なじみ度が関わっている可能性がある。インフォーマントにとってなじみ度の低い語であれば, 当然正答率も下がる。

갯-값 [개값] は「俗っぽい」ニュアンスを持った語であり<sup>26</sup>, その「俗っぽさ」は, 先行要素の개의語彙的意味は勿論, 後行要素の頭音の濃音によっても撐えられているように思われる。それ故標準語形は개값だと考えるのであり, ある種の過剰修正だと言えよう。

〈사이시옷〉が挿入されない〈1音節+1音節〉の語 (平均正答率: 49.3%)

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
76	제-격	うってつけ	118	98.3
29	귀-땀	耳打ち	83	69.2
62	수-평	雄雉	81	67.5
13	위-쪽	上の方	75	62.5
28	위-층	上の階	56	46.7
31	수-소	雄牛	27	22.5
27	해-님	お日さま	25	20.8
10	우-대	ソウル西北の仁旺山あたりの地域	8	6.7

<sup>26</sup> 남영신 엮음 (1997: 112) では, 見出し語갯-값の語義を「아주싼값을속되게이르는말.똥값.」としている。

제-격の正答率が極めて高いのは, 제격が抑々 [제격] とは普通発音されないものだからだろう<sup>27</sup>。

귀-땀や위-눅の正答率が比較的高く現れているのは, やや存外の結果である。これらは, 後行要素の頭音が濃音であるために 〈사이시옷〉が表記されない語であり (標準語規定標準語査定原則第12項), この規定は比較的好く認識されているように見える。しかし, 위-눅の正答率は大きく下がり (ただし後行要素の頭音は濃音ではなく激音), その理由は分明ではない。

《雄》を意味する接頭辞누-/ㄴ-は, ㄴ양《雄羊》, ㄴ염소《雄山羊》, ㄴ귀《雄鼠》ではㄴ-, それ以外では누-に統一することになっているが (標準語規定標準語査定原則第7項), 上の結果 (特に누-소) を見るに, この規定はあまり認識されていないと言える。누-땀の正答率がそれなりに高いのは, 누-/ㄴ-に関するかかる規定を認識していることに因るものではなく, 後行要素の頭音が濃音であることに因るものと思われる。

해-님は [해님] と発音されることが多いため, 正答率が低いのは首肯しうる結果である。なお, 해-님이 [해님] と発音されるのは, 교수-님《lit. 教授様》がしばしば [교수님] と発音されるのと同類の現象のようにも見えるが, 一方で, 달님 [달님]《お月さま》, 별님 [별님]《お星さま》がいずれも 〈閉音節+閉音節〉という構造になっている点に合わせようとする類推的な現象だとも考えうる。

우-대の正答率が顕著に低いのは, なじみ度も関与していよう。우-대는, 現代の若年層朝鮮語母語話者にとって歴史関連の本などでしか目撃しない語であろう。

以上のように, 語によって正答率に各々懸隔が認められるものの, 全体的な傾向として, 二字漢字語を除く, 〈1音節+1音節〉という構造では, 総じて 〈사이시옷〉が挿入されるものと認識されやすいと言いうる。

### 3.2. 〈1音節+2音節〉

〈1音節+2音節〉という構造では, 総じて 〈사이시옷〉が挿入される語の正答率は高く, 〈사이시옷〉が挿入されない語の正答率は低い。前者の平均正答率は93.1%, 後者の平均正答率は28.0%である。〈사이시옷〉が挿入される語群と挿入されない語群とに分けて見てみよう:

〈사이시옷〉が挿入される 〈1音節+2音節〉の語 (平均正答率: 93.1%)

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
70	웃-어른	一族の長老	119	99.2
25	콧-방귀 <sup>28</sup>	鼻であしらうこと	119	99.2
37	벧-머리	舳先	117	97.5
18	윗-사람	目上の人	116	96.7
16	갯-더미	灰の山	115	95.8
98	챗-바퀴	籐の枠	115	95.8
58	귓-속말	耳打ち	113	94.2
63	윗-머리	頭の上の部分	111	92.5

<sup>27</sup> 一方で, 성격《性格》, 인격《人格》などでは, 「格」は [격] と濃音化して発音される。

<sup>28</sup> 油谷幸利他 (1993:1764) では코방귀としているが, 本稿では국립국어연구원 (1999) に依拠しておく。



32	윗-입술	上唇	111	92.5
44	콧-방울	鼻翼	111	92.5
66	콧-노래	鼻歌	109	90.8
21	윗-잇몸	上歯茎	104	86.7
88	뒷-갈망	後始末	103	85.8
79	숫-염소	雄山羊	101	84.2

〈사이시옷〉が挿入されない〈1音節+2音節〉の語（平均正答率：28.0%）

番号	語	日本語訳	正答者数（人）	正答率（%）
8	뒤-풀이	打ち上げパーティー	49	40.8
53	수-사돈	婿側の相舅	42	35.0
69	수-나사	雄螺子	38	31.7
61	코-대답	鼻先であしらう答え	34	28.3
2	코-방아	うつ伏せに倒れて 地面に鼻柱を打ち付けること	5	4.2

以上のように、語によって正答率に差も認められるが、全体的な傾向として、〈1音節+2音節〉という構造では、総じて〈사이시옷〉が挿入されるものと認識されやすいといえる。

### 3.3. 〈1音節+3音節〉

〈1音節+3音節〉という構造の語は、本調査では예-스립다《古めかしい》の1語のみを対象とした。

-스립다は名詞に付いて形容詞を作る派生接尾辞であり、冠形詞（連体詞）の옛《昔の》ではなく、名詞の예《昔》と結合しなければならない。しかし、正答率は28.3%（正答者数34人）であり、かなり低い数値となった。これは中島仁（2002: 127）の調査結果とも吻合する<sup>29</sup>。

### 3.4. 〈2音節+1音節〉

次に、〈2音節+1音節〉という構造のものを見てみよう。

まず、後行要素が鼻音ないし /i/ で始まる語の正答率が概して高い。平均正答率は74.5%である：

後行要素が鼻音ないし /i/ で始まる 〈2音節+1音節〉の語（平均正答率：74.5%）

番号	語	日本語訳	正答者数（人）	正答率（%）
38	나무-잎	木の葉	118	98.3
1	시냇-물	小川の水	115	95.8
30	아랫-물	下流の水	114	95.0
14	아랫-목	オンドルの焚口に近い部分	109	90.8
58	귀엣-말	耳打ち	101	84.2

<sup>29</sup> 中島仁（2002）における예-스립다の正答率は30.4%である。

77	수돗-물	水道水	101	84.2
36	예삿-일	普通のこと	101	84.2
43	인사-말	挨拶のことば	101	84.2
104	농사-일 <sup>30</sup>	農作業	99	82.5
81	베갯-잇	枕カバー	99	82.5
18	존댓-말	丁寧語	99	82.5
87	바닷-물	海水	98	81.7
40	사삿-일	個人的なこと	84	70.0
87	바닷-말	海藻	83	69.2
80	혼잣-말	独り言	80	66.7
55	노랫-말	歌詞	77	64.2
97	두렛-일	結いの共同作業	74	61.7
100	제삿-날	祭祀の日	71	59.2
39	양칫-물	口漱ぎの水	57	47.5
3	머리-말	前書き	56	46.7
82	가윗-일	余分な仕事	41	34.2

これらは、〈사이시옷〉が挿入されるか否かで、先行要素の末音節の音節構造（開音節か閉音節か）までが変わってくるものである。すなわち、〈사이시옷〉が挿入される場合、先行要素の末音節は開音節から coda として /n/ を持つ閉音節となる<sup>31</sup>。一方で、後行要素が口音で始まるものは、〈사이시옷〉が挿入されても、後行要素の頭音が平音から濃音に交替するのみであって、音節構造の変容までは生じない。朝鮮語において、調音点と調音方法を同じくする平音と濃音は各々別の音素であり、最小対も数多存在するが、語によっては、話しことばにおいて、ある種のニュアンスを醸成するために平音を濃音で発音したり、方言間で平音か濃音かが異なったりすることがある。こうしたことを勘案すると、音節構造の変容が生じる、後行要素が鼻音や /i/ で始まる語において全体的に正答率が高く現れたのは得心のいく結果である。

〈2音節 + 1音節〉という構造の語のうち、後行要素が口音で始まるものについては、押し並べて〈사이시옷〉が挿入される語の正答率が低く、〈사이시옷〉が挿入されない語の正答率が高い。前者の平均正答率は43.1%、後者の平均正答率は75.2%である。〈사이시옷〉が挿入される語群と挿入されない語群とに分けて見てみよう：

〈사이시옷〉が挿入される 〈2音節 + 1音節〉の語（平均正答率：43.1%）

番号	語	日本語訳	正答者数（人）	正答率（%）
84	주춧-돌	礎石	113	94.2

<sup>30</sup> 油谷幸利他（1993: 405）では농삿일としているが、本稿では국립국어연구원（1999）に依拠しておく。

<sup>31</sup> 〈사이시옷〉が [n] として実現するのは、所謂〈口音の鼻音化〉による。後行要素が /i/ で始まるものについては、〈口音の鼻音化〉に先立ち、〈n 挿入〉も生じる。2.1. を参照。〈n 挿入〉については、辻野裕紀（2014ab）を参照。

16	담뱃-불	煙草の火	85	70.8
59	배냇-짓	寝ているときの赤ん坊の仕草	82	68.3
85	쌈짓-돈 <sup>32</sup>	煙草銭	80	66.7
86	기찻-길	線路	71	59.2
90	고갯-길	坂道	69	57.5
100	제삿-밥	祭祀を終えた後の食事	67	55.8
20	자릿-세	場所代	61	50.8
89	조갯-살	貝の剥き身	60	50.0
102	기왓-장	一枚一枚の瓦	57	47.5
99	하굿-둑	河口の堤	55	45.8
19	자릿-수	数の桁数	50	41.7
68	나잇-값	年甲斐	35	29.2
51	바닷-새	海鳥	35	29.2
101	전셋-집	チョンセで借りた家	33	27.5
46	날갯-짓	羽ばたき	30	25.0
73	근삿-값	近似値	27	22.5
67	등굣-길	通学路	23	19.2
41	안갯-속	(比喩的に) 霧の中	21	17.5
74	가댓-값	期待値	16	13.3
12	대폿-집	居酒屋	16	13.3

上の語群のうち、주춧-돌の正答率が突出して高いが、これは주춧が単独で用いられることは多くなく、주춧돌という複合語の形で用いられることが多いことに因ると思われる。すなわち、インフォーマントの多くは、주춧돌という形全体をそのまま記憶しているのであろう。

안갯-속は、比喩的な意味での「霧の中」(어떤 일이 어떻게 이루어질지 모르는 상태<sup>33</sup>)という語である。これは、形態的緊密性の観点に照らして複合語である<sup>34</sup>。一方で、文字通り「霧の中」という意味では안개 속のように分かち書きをしなければならない句となる。なお、いずれも発音は[안개속]である。このように、朝鮮語の複合語と句の境界は曖昧模糊としており、複合語なのか句なのかの判断に逡巡することが少なくない<sup>35</sup>。안갯-속の正答率が低いのはこうした事情も影響しているものと思われる。

〈사이시옷〉が挿入されない〈2音節+1音節〉の語 (平均正答率: 75.2%)

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
78	일기-장	日記帳	120	100.0

<sup>32</sup> 油谷幸利他 (1993: 1178) では쌈지돈としているが、本稿では국립국어연구원 (1999) に依拠しておく。

<sup>33</sup> 국립국어연구원 (1999) 参照。

<sup>34</sup> 形態的緊密性 (lexical integrity) については、影山太郎 (1993: 10-11, 2010: 2) を参照。

<sup>35</sup> 朝鮮語における複合語と句の峻別、分かち書きの問題などについては、하세가와 [長谷川由起子] (2009) を参照。

22	청주-댁	清州から嫁いできた奥さん	118	98.3
96	두레-박	釣瓶	115	95.8
74	기대-치	期待値	114	95.0
73	근사-치	近似値	112	93.3
47	동아-줄	太い綱	111	92.5
16	나무-꾼	樵	105	87.5
52	바퀴-살	車輪の輻	90	75.0
17	월세-방	ウォルセで借りた部屋	89	74.2
32	아래-턱뼈	下顎の骨	86	71.7
17	전세-방	チョンセで借りた部屋	79	65.8
13	아래-쪽	下の方	75	62.5
28	아래-층	下の階	71	59.2
45	거위-배	虫腹	63	52.5
9	아래-대 <sup>36</sup>	ソウルの東大門と光熙門一帯	6	5.0

전세-방は、〈漢字語+漢字語〉という構造であるがゆえに〈사이시옷〉が表記されない語であるが、実際の発音は [전세빵] のように濃音化が生じる。また, 방 (房) は母語話者にとって漢字語という意識が希薄なこともあり<sup>37</sup>, こうしたことも影響してか, 正答率がやや低めに現れている。

아래-쪽, 아래-층は, 後行要素の頭音が濃音や激音であるために〈사이시옷〉が表記されない語である。〈사이시옷〉を表記してもしなくても, 発音はいずれも [아래쪽], [아래층] となるため, 判断に窮したインフォーマントもいたものと思量される。

거위-배や아래-대의正答率が低いのはなじみ度が関わっていると思われる。現代の若年層朝鮮語母語話者にとって거위-배《虫腹》という語は明らかに日常語ではなく<sup>38</sup>, また아래-대《ソウルの東大門と光熙門一帯》も우-대と同じく歴史関連の本などでしか目撃しない語であろう。

以上のように, 語によって正答率に各々懸隔が認められ, 例外的なものも少なからず存在するが, 後行要素が口音で始まる, 〈2音節+1音節〉という構造の語では, 全体的な傾向として, 〈사이시옷〉が挿入されないものと認識されやすいと言いうる。

### 3.5. 〈2音節+2音節〉

〈2音節+2音節〉という構造でも, 一体に〈사이시옷〉が挿入される語の正答率は低く, 〈사이시옷〉が挿入されない語の正答率が高い。前者の平均正答率は45.6%, 後者の平均正答率は77.7%である。〈사이시옷〉が挿入される語群と挿入されない語群とに分けて見てみよう:

<sup>36</sup> 油谷幸利他 (1993:1195) では아랫대としているが, 本稿では국립국어연구원 (1999) に依拠しておく。

<sup>37</sup> 志部昭平 (1987:89) は방 (房) 《部屋》などの漢字語を「朝鮮語の中によく融け込んで日常の話し言葉でもよく使われ, ほとんど漢字語とは意識されていないのではないかと思われる例」として挙げている。

<sup>38</sup> また, 類義語의똥배との関係も考えられる。

## 〈사이시옷〉が挿入される〈2音節+2音節〉の語 (平均正答率: 45.6%)

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
18	아랫-사람	目下の人	105	87.5
20	오랫-동안	長い間	99	82.5
7	비눗-방울	シャボン玉	89	74.2
42	도봇-장수	行商人	33	27.5
23	구둑-주걱	靴篋	29	24.2
48	마맛-자국	痘痕	19	15.8
49	막냇-동생	末弟	9	7.5

아랫-사람の正答率が高いのは、なじみ度の高さに加えて、윗-사람との関係があるかもしれない。既に見たように、윗-사람は〈1音節+1音節〉の語であり、正答率は96.7%と極めて高かった。

오랫-동안の正答率が高い理由も、まずなじみ度の高さが考えられるが、それ以外に、동안は〈名詞+동안〉という構造で不完全名詞的（依存名詞的）に機能する場合には常に [똥안] と発音されることも関わっている可能性がある<sup>39</sup>。

막냇-동생の正答率が極端に低いのは、막내-아우で〈사이시옷〉が挿入されないことに加えて、後行要素동생が漢字語（同生）であることも作用しているかもしれない。

## 〈사이시옷〉が挿入されない〈2音節+2音節〉の語 (平均正答率: 77.7%)

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
49	막내-아우	末弟	116	96.7
50	먼지-바람	砂埃	116	96.7
97	두레-농사	結いの共同作業	98	81.7
11	예사-소리	平音	81	67.5
95	구레-나룻	頬髯	55	45.8

구레-나룻の正答率が低いのは、[구렌나룻] と発音されることが多いからであろう。

以上のように、語によって正答率に各々懸隔が認められるが、全体的な傾向として、〈2音節+2音節〉という構造の語では、総じて〈사이시옷〉が挿入されないものと認識されやすいと言いうる。

## 3.6. 〈3音節+1音節〉

〈3音節+1音節〉という構造のものについては、本調査では사글셋-방《月極で借りる部屋》と가로수-길《並木道》の2語しかない上、両者の正答率に大きな逕庭が認められるため、何らかの傾向を見出すことはできない。사글셋-방の正答率は27.5%、가로수-길の正答率は98.3%である：

<sup>39</sup> 菅野裕臣他 (1988; 1991: 249) 参照。

## 〈3音節+1音節〉の語

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
83	가로수-길	並木道	118	98.3
17	사글셋-방	月極で借りる部屋	33	27.5

사글셋-방の正答率が低く現れているのは、類義語의 월세-방において〈사이시옷〉が挿入されないこと、가로수-길の正答率が極めて高く現れているのは、国立国語院の website の「質疑応答 相談事例集<sup>40</sup>」をはじめ、〈사이시옷〉の表記が問題となる例としてよく取り上げられる有名なものであることも関連していよう。

## 3.7. 〈3音節+2音節〉

〈3音節+2音節〉という構造のものについても、本調査では회오리-바람《旋風》と미아리-고개《ミアリ峠》の2語しかないため、一斑を見て全豹を卜すようなことは一先ず差し控えておく：

## 〈3音節+2音節〉の語

番号	語	日本語訳	正答者数 (人)	正答率 (%)
54	회오리-바람	旋風	118	98.3
55	미아리-고개	ミアリ峠	115	95.8

## 4. おわりに

以上、若年層朝鮮語母語話者の、〈사이시옷〉の表記に関する認識度について、合成語の構造（音節数）ごとに分析を加えてきた。最後にその総括を簡単に行ない、擱筆することとする。

まず、〈사이시옷〉の表記は言語規範である程度規定されているとはいえ、個々の具体的な語に〈사이시옷〉が表記されるか否かは、語毎に決まっている。こうしたことが原因となり、語によって正答率にばらつきが認められる。そこには、当該の語に対するインフォーマントのなじみ度などが関わっているものと思量される。

また、分節音に着目すると、〈2音節+1音節〉という構造の語では、後行要素が鼻音や /i/ で始まる場合、正答率が高い。〈2音節+1音節〉以外の構造の語ではかかる条件を満たす語例が多くないために本調査の結果からは断じ得ないが、語例を増やしてさらなる調査を行なえば、他の構造の語でも同じ傾向が見られる可能性があるものと思考する。

一方、全体的な傾向としては、〈1音節+1音節<sup>41</sup>〉、〈1音節+2音節〉という構造の語では〈사이시옷〉が挿入されるものと認識されやすく、〈2音節+1音節〉、〈2音節+2音節〉という構造の語では〈사이시옷〉が挿入されないものと認識されやすいことが闡明された。また、語例が少ないために一般化は留保したが、〈1音節+3音節〉의 예-스립다の正答率が28.3%、〈3音節+1音節〉의 사글셋-방と가로수-길の正答率が各々27.5%と98.3%、〈3音節+

<sup>40</sup> [http://korean.go.kr/09\\_new/minwon/mofaq\\_view.jsp?idx=367](http://korean.go.kr/09_new/minwon/mofaq_view.jsp?idx=367)

<sup>41</sup> ただし、二字漢字語は別である。

2音節)の회오리-바람과미아리-고개の正答率が各々98.3%と95.8%であることも勘案すると、先行要素が単音節の場合には〈사이시옷〉が挿入されるものと認識されやすく、複音節の場合には〈사이시옷〉が挿入されないものと認識されやすいと結論づけうる<sup>42</sup>。

## 参考文献

### (1) 日本語文献

- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』, 梅田博之監修, 前田真彦訳, 東京: 大修館書店.
- 伊藤英人 (2006) 「現代における朝鮮半島以外のコリア語」, 『世界のコリアン』(アジア遊学 92), 東京: 勉誠出版.
- 伊藤英人 (2013) 「特集「所有・存在表現」朝鮮語」, 『語学研究所論集』18, 東京: 東京外国語大学語学研究所.
- 梅田博之 (1993) 「延辺朝鮮語の音韻」, 『言語文化接触に関する研究』6, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 小倉進平著, 河野六郎補注 (1964) 『増訂補注朝鮮語学史』, 東京: 刀江書院.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎 (2010) 「日本語形態論における漢語の特異性」, 大島弘子・中島晶子・ブラン, ラウル編 『漢語の言語学』, 東京: くろしお出版.
- 菅野裕臣 (1985a) 「朝鮮語のローマ字転写とカタカナ表記」, 『基礎ハンゲル』5, 東京: 三修社.
- 菅野裕臣 (1985b) 「朝鮮語の外来語表記法」, 『基礎ハンゲル』6, 東京: 三修社.
- 菅野裕臣 (1986a) 「朝鮮語の方言, 標準語, ソウルことば」, 『基礎ハンゲル』9, 東京: 三修社.
- 菅野裕臣 (1986b) 「朝鮮語の正書法」, 『基礎ハンゲル』11, 東京: 三修社.
- 菅野裕臣 (2004) 『朝鮮の漢字音の話』, 千葉: 神田外語大学韓国語学科.
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 (1988; 1991) 『コスモス朝和辞典 第2版』, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力, 東京: 白水社.
- 金珍娥 (2007) 「韓国語のローマ字表記法」, 野間秀樹編著 (2007) 所収.
- 金永奎 (1992) 『ハンゲル標準語と表記法辞典』, 東京: 南雲堂フェニックス.
- 窪蘭晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』, 東京: くろしお出版.
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」, 杉藤美代子編 『講座日本語と日本語教育 第2巻 日本語の音声・音韻 (上)』, 東京: 明治書院.
- 志部昭平 (1987) 「朝鮮語における漢字語の位置」, 『日本語学』6, 東京: 明治書院.
- 高山倫明 (2012) 『日本語音韻史の研究』, 東京: ひつじ書房.
- 鄭稀元 (2007) 「韓国と北朝鮮の言語差」, 野間秀樹編著 (2007) 所収.
- 鄭熙昌 (2007) 「ハンゲル正書法と標準語」, 野間秀樹編著 (2007) 所収.
- 辻野裕紀 (2010) 「〈越境〉した言語 —在外コリアンの朝鮮語と言語生活をめぐって—」, 『朝鮮語教育—理論と実践—』5, 東京: 朝鮮語教育研究会.
- 辻野裕紀 (2014a) 「現代朝鮮語の〈n挿入〉に関する一考察 —発生論と機能論—」, 『韓国朝

<sup>42</sup> この結論と関連して、夙に기세관 (1991) が〈사이시옷〉の機能が「先行語の自立性の維持」にあるとしたのは示唆的である。

- 鮮文化研究』13, 東京: 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.
- 辻野裕紀 (2014b) 『朝鮮語 〈n 挿入〉攷 —音韻論と形態論—』, 東京大学大学院人文社会系研究科博士学位論文.
- 中島仁 (2002) 「現代朝鮮語の言語規範 —その変遷と認識度調査を中心に—」, 『語学研究所論集』 7, 東京: 東京外国語大学語学研究所.
- 中島仁 (2007) 「外来語表記法をめぐる」, 野間秀樹編著 (2007) 所収.
- 野間秀樹 (2007) 「音声学からの接近」, 野間秀樹編著 (2007) 所収.
- 野間秀樹編著 (2007) 『韓国語教育論講座 第1巻』, 東京: くろしお出版.
- 福井玲 (1993) 「中期朝鮮語の複子音と濃音について」, 『外国語科紀要』 41-5, 東京: 東京大学教養学部外国語科.
- 福井玲 (2003) 「古代朝鮮語についての若干の覚え書き」, アレキサンダー, ボビン・長田俊樹編 『日本語系統論の現在』, 京都: 国際日本文化研究センター.
- 福井玲 (2013) 『韓国語音韻史の探究』, 東京: 三省堂.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』, 東京: くろしお出版.
- 宮下尚子 (2007) 『言語接触と中国朝鮮語の成立』, 福岡: 九州大学出版会.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 (1993) 『朝鮮語辞典』, 東京: 小学館.

## (2) 朝鮮語文献

- 간노 [菅野裕臣] (1993) 「한글과 정서법」, 『국어학』 23, 서울: 국어학회.
- 곽충구·박진혁·소신애 (2008) 『중국 이주 한민족의 언어와 생활 —길림성 회룡봉』, 서울: 태학사.
- 국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』, 서울: 두산동아.
- 국립국어연구원 (2003) 『표준 발음 실태 조사Ⅱ』, 김선철 (연구 책임), 권미영·황연신 (공동연구), 서울: 국립국어연구원.
- 권용경 (2014) 『사이시옷의 역사적 연구』, 서울: 삼경문화사.
- 기세관 (1991) 「첨가음 /ㄴ/ 의 기능」, 『어문논총』 12·13, 광주: 전남대학교.
- 김민수 편저 (1997) 『김정일 시대의 북한언어』, 서울: 태학사.
- 김진호 (2010) 『개정판 외국어로서의 한국어학 개론』, 서울: 도서출판 박이정.
- 김차균 (1984) 「현대 국어의 사이스」, 『언어학』 7, 서울: 한국언어학회.
- 김창섭 (1996) 『국어의 단어형성과 단어구조 연구』, 서울: 태학사.
- 김홍석 (2007) 『국어생활백서 —틀리기 쉬운 우리말 1260가지』, 서울: 도서출판 역락.
- 남영신 엮음 (1997) 『국어대사전』, 과주: 성안당.
- 리명복·리영섭·김인옥·진향련·최영희·안동매 (2008) 『학생용 조선말실용규범집』, 연길: 연변인민출판사.
- 민현식 (1999) 『국어 정서법 연구』, 서울: 태학사.
- 박덕유 (2009) 『개정판 학교문법론의 이해』, 서울: 도서출판 역락.
- 송대현 (2011) 「사이시옷 표기 실태조사 연구」, 『우암논총』 33, 청주: 청주대학교.
- 안병희 (1968) 「중세국어의 속격어미 ‘-스’에 대하여」, 『이승녕박사송수기념논총』, 서울: 을유문화사.
- 안병희·이광호 (1990) 『중세국어문법론』, 서울: 학연사.
- 염태수 (2013) 『표준어의 음운현상에 대한 연구』, 서울: 도서출판 박문사.



- 이기문 (1998; 2005) 『신정판 국어사개설』, 서울 : 태학사.
- 이익섭 · 이상억 · 채완 (1997) 『한국의 언어』, 성남 : 신구문화사.
- 이희승 · 안병희 (1989) 『한글 맞춤법 강의』, 성남 : 신구문화사.
- 임동훈 (1996) 「외래어 표기법의 원리와 실제」, 『새국어생활』 6-4, 서울 : 국립국어연구원.
- 임흥빈 (1981) 「사이시옷 문제의 해결을 위하여」, 『국어학』 10, 서울 : 국어학회.
- 임흥빈 (1996) 「외래어 표기의 역사」, 『새국어생활』 6-4, 서울 : 국립국어연구원.
- 전철웅 (1990) 「사이 시옷」, 서울대학교 대학원 국어연구회 편 『국어연구 어디까지 왔나 — 주제별 국어학 연구사—』, 서울 : 동아출판사.
- 정희창 (2000) 「『표준국어대사전』에 반영된 ‘어문 규범’의 원리와 실제」, 『새국어생활』 10-1, 서울 : 국립국어연구원.
- 정희창 감수 (2007) 『친절한 맞춤법』, 서울 : 종이책.
- 최용기 (2010) 『한국어 정책의 이해』, 서울 : 한국문화사.
- 최형용 (2013) 『한국어 형태론의 유형론』, 서울 : 도서출판 박이정.
- 최희자 (2013) 『한국어의 로마자 표기법에 관한 연구』, 목원대학교 대학원 석사학위논문.
- 하세가와 [長谷川由起子] (2009) 「한국어의 띄어쓰기와 단어 인정에 대하여 —한국어 교육의 시점에서—」, 『朝鮮語教育 —理論と実践—』 4, 新潟 : 朝鮮語教育研究会.
- 하세경 (2006) 『현대국어 사잇소리 현상의 형태론과 음운론』, 서울대학교 대학원 박사학위논문.

### (3) 英語文献

Sohn, Ho-min (1994) *Korean*, London&New York: Routledge.

【謝辞】 本稿の執筆にあたっては、多くの方々のご協力を得た。まず、アンケート調査に応じてくださったインフォーマントの方々に感謝する。また、調査の便宜を図ってくださった、崇実大学の河崎啓剛先生、誠信女子大学の藤井勉先生、アンケート用紙作成にあたって貴重なご教示をくださった、九州大学の李相穆先生に深謝申し上げたい。さらに、データ整理を快く手伝ってくれた、九州大学の学生の皆さんにも感謝する。なお、言うまでもなく、本稿の瑕疵はすべて筆者の責任に帰するものである。

【附記】 本研究は、平成25-26年度科学研究費若手研究 (B) (研究課題番号 : 25770151) 「現代朝鮮語における〈濃音化〉の総合的研究」の成果の一部である。

### 【参考資料1】ハンゲル綴字法 (한글 맞춤법)

「ハンゲル綴字法」は、1988年1月19日に大韓民国文教部<sup>43</sup>によって告示されたものである。全6章と付録からなる：

- 第1章 総則
- 第2章 字母
- 第3章 音に関すること
  - 第1節 濃音
  - 第2節 口蓋音化
  - 第3節 ‘ㄹ’音のパッチム
  - 第4節 母音
  - 第5節 頭音法則
  - 第6節 畳語音
- 第4章 形態に関すること
  - 第1節 体言と助詞
  - 第2節 語幹と語尾
  - 第3節 接尾辞が付いてできた語
  - 第4節 合成語および接頭辞が付く語
  - 第5節 縮約語
- 第5章 分かち書き
  - 第1節 助詞
  - 第2節 依存名詞, 単位を表す名詞および列挙する語など
  - 第3節 補助用言
  - 第4節 固有名詞および専門用語
- 第6章 その他のこと
- 付録 文の符号

### 【参考資料2】標準語規定 (표준어 규정)

「標準語規定」も、1988年1月19日に大韓民国文教部によって告示されたものである。「第1部 標準語査定原則」と「第2部 標準発音法」とに大別され、各々3章、7章からなる：

- 第1部 標準語査定原則
  - 第1章 総則
  - 第2章 発音変化に伴う標準語規定
    - 第1節 子音

<sup>43</sup> 現在の「教育部」にあたる政府機関。教育部は、1948年に「文教部」という名で発足し、1990年に「教育部」、2001年に「教育人的資源部」と改称し、さらに2008年に科学技術部と統合してできた「教育科学技術部」の後身である。2013年に発足した。日本の文部科学省におおよそ相当し、教育政策を統括している。

- 第2節 母音
- 第3節 縮約語
- 第4節 単数標準語
- 第5節 複数標準語

### 第3章 語彙選択の変化に伴う標準語規定

- 第1節 古語
- 第2節 漢字語
- 第3節 方言
- 第4節 単数標準語
- 第5節 複数標準語

## 第2部 標準発音法

- 第1章 総則
- 第2章 子音と母音
- 第3章 音の長さ
- 第4章 パッチムの発音
- 第5章 音の同化
- 第6章 濃音化
- 第7章 音の添加

### 【参考資料3】朝鮮語のローマ字表記<sup>44</sup>

朝鮮語のローマ字表記の事実上の嚆矢は、1939年のマッキューン・ライシャワー方式（M・R方式）と言ってよいだろう<sup>45</sup>。宣教師のジョージ・M・マッキューンと歴史学者のエドウィン・O・ライシャワー（いずれもアメリカ人）によって発表されたローマ字表記である。同じ平音でも語頭か語中かによって異なる字を使うなど、基本的には transliteration（翻字）ではなく、transcription（転写）である。所謂반달표や어깨표などの補助符号が用いられているのも特徴的である。

1940年には、朝鮮語学会（現在のハングル学会）が「外来語表記法統一案」の付録として「朝鮮語音羅馬字表記法（조선어음 라마자 표기법）」を発表した。スに z, ヌに cz を対応させる点や、マッキューン・ライシャワー方式と同じく반달표を用いている点などが目につく。ただし、マッキューン・ライシャワー方式と異なり、語頭の平音にも語中の平音にも同じ字を使っている。

大韓民国が樹立された、1948年には、文教部により、新たなローマ字表記法が発表された。

また、1959年には同じく文教部により、別のローマ字表記法が制定された。これまでのローマ字表記と異なり、補助符号を用いていない点が特徴である。

さらに、1984年にはまた別のローマ字表記法が文教部により発表された。これはマッキュー

<sup>44</sup> 以下の記述は、菅野裕臣（1985a）、이희승・안병희（1989）、민현식（1999）、中島仁（2002）、金珍娥（2007）、김진호（2010）、최희자（2013）などを参照している。

<sup>45</sup> ヴイトセンの“*Noord en Oost Tartarjie*”（1692年）の朝鮮語の表記など、20世紀以前の欧米人による朝鮮語のローマ字表記については茲では触れない。小倉進平（1964: 69-）などを参照されたい。

ン・ライシャワー方式とほぼ同じである。ハは母音 | の前では sh, それ以外の母音の前では s で表記する。

現行の「国語のローマ字表記法」は、2000年に文化観光部<sup>46</sup>が告示したものである。これは1959年の文教部方式とよく似ており、ㄱやㄴ, 濃音の一部などの表記を除けば、両者は同一である。口音の鼻音化, 流音の鼻音化, n 挿入, 口蓋音化, 激音化などの音韻交替を表記に反映させる点で<sup>47</sup>, transcription に近い<sup>48</sup>。

他に, 学会などでは, 河野六郎式, Yale 式, 福井玲式なども用いられる<sup>49</sup>。また, キリル文字の Холодович 式もある。

以下に, 代表的なローマ字表記の対照表を示す:

母音字母ローマ字表記対照表

	M・R	1940	1948	1959	1984	2000	河野	Yale	福井	ホロド
ㅏ	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
ㅑ	ya	ya	ya	ya	ya	ya	ia	ya	ia	я
ㅓ	wa	wa	wa	wa	wa	wa	oa	wa	oa	ва
ㅕ	ō	ō	ō	eo	ō	eo	e	e	e	о
ㅛ	yō	yō	yō	yeo	yō	yeo	ie	ye	ie	йо
ㅜ	wō	wō	wō	weo	wō	wo	ue	we	ue	вo
ㅝ	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
ㅠ	yo	yo	yo	yo	yo	yo	io	yo	io	ё
ㅢ	u	u	u	u	u	u	u	wu	u	у
ㅠ	yu	yu	yu	yu	yu	yu	iu	yu	iu	ю
ㅝ	ae	ě	ai	ae	ae	ae	ai	ay	ai	э
ㅞ	yae	yě	yai	yae	yae	yae	iai	yay	iai	йэ
ㅟ	wae	wě	wai	wae	wae	wae	oai	way	oai	вэ
ㅠ	e	e	e	e	e	e	ei	ey	ei	e
ㅡ	ye	ye	ye	ye	ye	ye	iei	yey	iei	йе
ㅢ	we	we	we	we	we	we	uei	wey	uei	ве
ㅣ	oe	oe	oe	oe	oe	oe	oi	oy	oi	ве
ㅡ	ū	ū	ū	eu	ū	eu	y	u	y	ы
ㅣ	i	i/yi	i	i	i	i	i	i	i	и
ㅤ	ūi	ūi	ūi	eui	ūi	ui	yi	uy	yi	ый
ㅦ	wi	wi	wi	wi	wi	wi	ui	wi	ui	ви

<sup>46</sup> 文化観光部は, 2008年に「国政広報処」を吸収し, 「文化体育観光部」と改称された。

<sup>47</sup> e. g. 백마 Baengma, 왕십리 Wangsimni, 학여울 Hangnyeoul, 해돋이 haedoji, 종교 joko. ただし, 名で起こる音韻交替は表記に反映させない: e. g. 한복남 Han Boknam, 흥빛나 Hong Bitna.

<sup>48</sup> ただし, 濃音化は表記に反映させない: e. g. 압구정 Apgujeong

<sup>49</sup> 河野六郎式と福井玲式は, 現代語で用いる字母を見る限り同一だが, 古ハングルの表記において一部異なる。例えば, いわゆる옛이응を河野六郎式では ng とするのに対し, 福井玲式では q とする。

子音字母 (初声) ローマ字表記対照表

	M・R	1940	1948	1959	1984	2000	河野	Yale	福井	ホロド
ㄱ	k/g	g	k	g	k/g	g	g	k	g	к
ㄷ	t/d	d	t	d	t/d	d	d	t	d	т
ㅂ	p/b	b	p	b	p/b	b	b	p	b	п
ㅈ	ch/j	z	ch	j	ch/j	j	j	c	j	ч
ㅋ	k'	k	kh (k')	k	k'	k	k	kh	k	кх
ㅌ	t'	t	th (t')	t	t'	t	t	th	t	тх
ㅍ	p'	p	ph (p')	p	p'	p	p	ph	p	пх
ㅊ	ch'	cz	chh	ch	ch'	ch	c	ch	c	чх
ㄲ	kk	gg	gg	gg	kk	kk	gg	kk	gg	кк
ㄸ	tt	dd	dd	dd	tt	tt	dd	tt	dd	тт
ㅃ	pp	bb	bb	bb	pp	pp	bb	pp	bb	пп
ㅆ	tch	zz	dch	jj	tch	jj	jj	cc	jj	чч
ㅅ	s	s	s	s	s/sh	s	s	s	s	с
ㅆ	ss	ss	ss	ss	ss	ss	ss	ss	ss	сс
ㅎ	h	h	h	h	h	h	h	h	h	х
ㄴ	n	n	n	n	n	n	n	n	n	н
ㄹ	m	m	m	m	m	m	m	m	m	м
ㄺ	r	r	r	r	r	r	r	l	r	л

【参考資料4】 アンケート用紙

언어 규범 (표기법) 에 관한 실태조사

이 설문 조사는 한국어의 언어 규범에 대한 모어화자들의 인식도를 조사하기 위한 것입니다. 조사 내용은 학술적인 목적 이외에는 사용하지 않을 것을 약속드립니다. 또한 여러분의 소중한 개인정보도 절대 밖으로 유출되지 않으니 아시는 대로 정확하고 빠짐없이 답변해 주시길 부탁드립니다. 감사합니다.

● 다음 문장을 읽고 괄호 안의 표기가 맞다고 생각하는 것을 고르십시오.

- (1) 맑은 (시내물/ 시냇물) 속에서 물고기가 헤엄쳐 다닌다.
- (2) 돌부리에 걸려 (코방아/ 콧방아) 를 찢었다.
- (3) 그 책의 (머리말/ 머릿말) 에는 저자가 가장 주장하고 싶은 중요한 내용이 쓰여 있다.
- (4) 우리 (네째/ 넷째) 딸은 머리가 아주 좋다.
- (5) 그 표현은 조금 (예스러운/ 옛스러운) 표현이므로 젊은 사람들은 거의 사용하지 않는다.
- (6) 일에서 십까지 한 가지 (수자/ 숫자) 를 골라라.
- (7) 아이들이 (비누방울/ 비눗방울) 을 불며 신이 나게 놀고 있다.
- (8) 내일은 학교 축제가 끝난 후에 (뒤풀이/ 뒷풀이) 파티가 있다.
- (9) 옛날에는 서울 성 안의 동대문과 광희문 지역을 (아래대/ 아랫대) 라고 했었다.

- (10) 옛날에는 서울 성내의 서북쪽 지역을 (우대/웃대) 라고 했었다.
- (11) 한국어의 자음에는 (예사소리/예삿소리), 거센소리, 된소리 등이 있다.
- (12) 집에 가는 길에 (대포집/대뽕집) 에 들러 소주를 한 잔 마셨다.
- (13) 산 (위쪽/윗쪽) 에서 (아래쪽/아랫쪽) 으로 갑자기 찬 바람이 불어왔다.
- (14) 그는 (아래목/아랫목) 에 요를 깔고 잤다.
- (15) 그는 (위목/윗목) 에 요를 깔고 잤다.
- (16) (나무꾼/나뭇꾼) 이 끄지 않았던 (담배불/담뱃불) 때문에 발생한 산불로 도시가 일시에 (재더미/잣더미) 가 돼 버렸다.
- (17) 그 학생은 (전세방/전셋방) 이 아니라 (사글세방/사글셋방), 즉 (월세방/월셋방) 에 살고 있다.
- (18) (아래사람/아랫사람) 은 (위사람/윗사람) 에게 (존대말/존댓말) 을 써야 한다.
- (19) 그 선수는 10년 연속 두 (자리수/자릿수) 홈런 기록을 달성했다.
- (20) 그는 (오래동안/오랫동안) 비싼 (자리세/자릿세) 를 내면서 이 동네에서 장사하고 있다.
- (21) (위잇몸/윗잇몸) 이 부어서 (치과/치과) 에 갔다.
- (22) 청주에서 시집온 여자를 (청주댁/청죽댁) 이라고 부른다.
- (23) 구두를 신을 때는 (구두주걱/구뚫주걱) 이 없으면 불편하다.
- (24) 나는 서울에서 산 지 벌써 (해수/햇수) 로 10년이 된다.
- (25) 전에는 점쟁이 말이라면 (코방귀/콧방귀) 부터 귀였었는데 일이 묘하게 아귀가 맞다 보니 꼭 우연이라고만 생각할 수가 없다.
- (26) 날씨가 너무 따뜻해서 김치가 (초국/춧국) 이 되어 버렸다.
- (27) 한국어로는 해를 의인화해서 (해님/햇님) 이라고 하기도 한다.
- (28) (위층/윗층) 에서 아이가 걷는 발소리가 자꾸 들려 와서 (아래층/아랫층) 주민은 잠도 제대로 못 자고 있다.
- (29) 좋은 소식이 있을 것이라고 (귀땀/귓땀) 해 준다.
- (30) (위물/윗물) 이 맑아야 (아래물/아랫물) 이 맑다.
- (31) 덩치가 큰 (수소/숫소) 를 황소라고 한다.
- (32) 교통사고로 (아래턱뼈/아랫턱뼈) 가 부러졌고 또 (위입술/윗입술) 도 껀때는 큰 상처를 입었다.
- (33) 그 생물학자는 (수쥐/숫쥐) 들을 두 무리로 나눠서 실험했다.
- (34) 그 섬에는 운송 수단이 없어서 (떼목/뺏목) 을 이용해 육지로 이동했다.
- (35) 트럭에 실은 짐의 (개수/갯수) 를 다시 한번 잘 세어 보라.
- (36) 이것은 아무리 생각해도 (예사일/예삿일) 이 아니다.
- (37) (배머리/뺏머리) 를 이물이라고도 한다.
- (38) 밖에서 (나무잎/나뭇잎) 이 스치는 소리가 들린다.
- (39) 날씨가 몹시 추운 날이면 할머니는 (양치물/양칫물) 을 마루에 올려놓아 주셨다.
- (40) (사사일/사삿일) 은 남에게 시키지 마라.
- (41) 프로 야구의 순위 다름은 갈수록 (안개속/안갯속) 이다.
- (42) 그가 (도부장수/도뽕장수) 개 후리듯 자기 자식을 마구 때리는 것을 보니 아무래도 제정신이 아닌 듯싶었다.
- (43) 그 말은 그냥 지나가는 (인사말/인삿말) 이 아니라 진심인 것 같았다.
- (44) 신이 나서 (코방울/콧방울) 을 썰룩거린다.
- (45) (거위배/거윗배) 가 아프다.
- (46) 해오라기가 크게 (날개짓/날갯짓) 을 하면서 날아올랐다.

- (47) 죄수를 (동아줄/ 동앗줄) 로 읊아매었다.
- (48) 천연두를 앓고 얼굴에 (마마자국/ 마맛자국) 이 남아 버렸다.
- (49) (막내동생/ 막넛동생) 은 (막내아우/ 막넛아우) 라고도 한다.
- (50) 버스가 뽀얀 (먼지바람/ 먼짓바람) 을 일으키고 지나갔다.
- (51) 갈매기는 혼한 (바다새/ 바닷새) 다.
- (52) 요즘 (바퀴살/ 바퀴살) 이 없는 자전거가 출시됐다고 한다.
- (53) 여자 사돈을 암사돈, 남자 사돈을 (수사돈/ 숫사돈) 이라고 한다.
- (54) 미국 동남부에 (회오리바람/ 회오릿바람) 이 마을을 휩쓸고 지나갔다.
- (55) 트로트 곡의 (노래말/ 노랫말) 에도 나오는 (미아리고개/ 미아릿고개) 는 성북구 동선동과 돈암동 사이에 있다.
- (56) 그는 사랑하는 아내를 여의고 술을 마시는 (회수/ 횃수) 가 늘었다.
- (57) 안경의 (도수/ 돛수) 가 너무 높아서 어지럽다.
- (58) (귀에말/ 귀엣말) 을 (귀속말/ 귓속말) 이라고도 한다.
- (59) 아이는 이따금 (배내짓/ 배넛짓) 을 하면서 천사같이 자고 있었다.
- (60) 중요한 이야기를 (귀전/ 귓전) 으로 듣지 마라.
- (61) 그는 내 말에 마치못해 (코대답/ 콧대답) 하면서 방을 나갔다.
- (62) (수평/ 수평) 은 장끼, 암평은 까투리라고도 한다.
- (63) 햇볕에 오래 서 있었더니 (위머리/ 윗머리) 가 뜨겁다.
- (64) 저 가게는 질이 안 좋은 물건을 (개값/ 갯값) 으로 팔고 있다.
- (65) 고기를 먹을 때는 역시 (깨잎/ 깻잎) 으로 싸서 먹어야 맛있다.
- (66) 현주는 시험에 붙어 기분이 좋은지 아까부터 계속 흥얼흥얼 (코노래/ 콧노래) 를 부르고 있다.
- (67) 지수는 (등고길/ 등곶길) 에 지우개를 사러 문구점에 잠깐 들렀다.
- (68) 제발 (나이값/ 나잇값) 좀 해라.
- (69) (수나사/ 숫나사) 를 불트, 암나사를 너트라고도 한다.
- (70) (우어른/ 웃어른) 의 말씀은 잘 새겨들어야 한다.
- (71) 정숙이는 (차잔/ 찻잔) 에 뜨거운 홍차를 따랐다.
- (72) 나는 그 문제에 관한 논쟁의 (초점/ 촛점) 이 도대체 어디에 있는지 잘 모르겠다.
- (73) 수학에서 근사계산으로 얻어진 수치로 참값에 가까운 값을 (근사값/ 근삿값) 내지 (근사치/ 근삿치) 라고 한다.
- (74) 수학에서 어떤 사건이 일어날 때 얻어지는 양과 그 사건이 일어날 확률을 곱하여 얻어지는 가능성의 값을 (기대값/ 기댓값) 내지 (기대치/ 기댓치) 라고 한다.
- (75) 매달 첫 번째 일요일은 우리 (계날/ 깻날) 이다.
- (76) 이런 일에는 그 사람이 (제격/ 쟈격) 이다.
- (77) 여름철에는 (수도물/ 수돛물) 을 반드시 끓여서 먹어야 한다.
- (78) 그는 오늘 있었던 일들을 (일기장/ 일깃장) 에 낱낱이 적었다.
- (79) 염소의 수컷을 (수염소/ 숫염소), 양의 수컷을 (수양/ 숫양) 이라고 한다.
- (80) 철수는 중얼중얼 (혼자말/ 혼잣말) 을 하는 버릇이 있다.
- (81) 눈물은 추적추적 끝없이 (베개잇/ 베갯잇) 을 적셨다.
- (82) 일이 다 끝났는데도 (가외일/ 가윗일) 을 계속 시켰다.
- (83) 짧은 부부가 (가로수 길/ 가로숫길) 을 정답게 걷고 있다.
- (84) 대한축구는 한국 축구 발전의 (주춧돌/ 주춧돌) 역할을 해 왔다.

- (85) 불우 이웃 돕기 모금에 (쌈지돈/쌈짓돈) 이나마 보태려고 한다.
- (86) 수업이 끝나면 친구와 나는 학교 옆의 (기차길/기차길) 을 따라 걸어서 집으로 오곤 했다.
- (87) 돌김이란 홍조식물 보라털과 김속의 (바다말/바닷말) 중에서 (바다물/바닷물) 속의 돌에 붙어 자란 김을 이른다.
- (88) 이왕 벌여 놓은 일이니 (뒤갈망/뒷갈망) 이나 잘 하자.
- (89) (조개살/조갯살) 로 국물을 내어 칼국수를 끓이면 시원한 맛이 일품이다.
- (90) 우리는 가파른 (고개길/고갯길) 에 접어들었다.
- (91) (후일/훗일) 은 내가 처리해 주마.
- (92) 폭우로 (배길/벧길) 이 끊어져 섬에 갇혔다.
- (93) 바람에 (대잎/댓잎) 이 서걱대는 소리가 들린다.
- (94) 이 황해도 사내 강 씨는 나보다 1년쯤 늦게 바로 우리 집 마당 끝의 축대 (위집/윗집) 으로 이사를 온 사람이다.
- (95) 그 남자는 (구레나룻/구렛나룻) 이 거머게 자라 있었다.
- (96) (두레박/두렛박) 으로 물을 길어 동이에 부었다.
- (97) (두레일/두렛일) 은 (두레농사/두렛농사) 라고도 한다.
- (98) 이 일은 다람쥐 (체마귀/챗마귀) 들듯 답보 상태다.
- (99) 방문단은 서천의 대표 관광지인 금강 (하구둑/하굿둑) 을 방문하였다.
- (100) 내 아버지가 무슨 복이 많아서 엄숙하고 성스럽고 (제사날/제삿날) 에 그런 (제사밥/제삿밥) 을 얻어 잡수시겠어.
- (101) 나는 창신동에 (전세집/전셋집) 을 빌려 살고 있다.
- (102) (재빛/젓빛) 지붕의 골이 진 (기와장/기왓장) 에는 으스스 저녁 빛이 묻어 오고 있었다.
- (103) 나는 부산 광안리에 있는 유명한 (회집/횃집) 에서 맛있는 전어 회를 먹었다.
- (104) 봄철이라 모두 (농사일/농삿일) 에 바쁘다.

●협조해 주셔서 대단히 감사합니다. 마지막으로 【예】 를 참조하셔서 아래의 항목을 기입하여 주시기 바랍니다 :

【예】

· 성명 : 김수진  
 · 성별 : 여  
 · 생년월일/나이 : 1993년 4월15일/만21세  
 · 출생지 및 지금까지 살아본 장소 : 서울시 금천구에서 태어나 초등학교 4학년까지 금천구에 거주. 초등학교 4학년부터 지금까지 서울시 중랑구에 거주.  
 · 소속 : 성신여자대학교 일어일문학과 (대학생)  
 · 연락처 : kimsujin0415@hanmail.net

· 성명 :  
 · 성별 :  
 · 생년월일/나이 :  
 · 출생지 및 지금까지 살아본 장소 :  
 · 소속 :  
 · 연락처 :



**Linguistic Norm and Recognition Rate in Modern Korean Language:  
Focusing on “saisios”**

TSUJINO Yuki

In modern Korean language, when two morphemes are joined together, the initial lax sound of the latter element may change to a tensed sound. This phenomenon is called “tensification of a compound word”. When the first element ends with vowel, “s” is written as *patchim* (a letter of syllable-final consonants) of the terminal syllable of the element. This “s” is called “saisios”. On the other hand, when the first element ends with consonant, this “saisios” is not written, and “tensification of the compound word” is not reflected at the character level.

Differences in generation, region, and individuals can be seen in the “tensification of a compound word” and even native speakers often wonder whether “saisios” should be written or not. Hence, 120 students attending universities in Seoul, Korea, were surveyed focusing on whether “saisios” should be written in 126 compound words with assumed difficulty by an either-or choice questionnaire. The following results were obtained.

First, even though writing “saisios” is regulated by linguistic norm to some degree, whether or not “saisios” should be inserted in a specific word is determined according to that individual word. Accuracy rate was variable for this reason. Familiarity to a specific word is also considered to be a factor.

On the other hand, the general tendency is as follows. (1) For the word compositions such as <one syllable + one syllable>, <one syllable + two syllables>, and <one syllable + three syllables>, the accuracy rate is higher for the insertion of “saisios”. (2) For the word compositions such as <two syllables + one syllable>, <two syllables + two syllables>, <three syllables + one syllable>, and <three syllables + two syllables>, the accuracy rate is higher for non-insertion of “saisios”. This suggests that there is a higher awareness of the insertion of “saisios” for a single syllable of the first element, and that it should not be inserted for multiple syllables.